

■研究調査レビュー

奄美の方言(2)

木部 暢子 (鹿児島大学法文学部)

2.1.3 南奄美方言の音の特徴

(1)母音 前号で見た北奄美方言は、母音を7種類持っていて、それで発音が複雑になっていましたが、南奄美方言（喜界島南部・沖永良部島・与論島）では母音はa, i, u, e, oの5種類です。そのうちeとoはai, auなどが融合して新たに生じた母音ですから、基本的にはa, i, uの3母音です。

図9 南奄美方言の母音

〈共通語〉 〈南奄美方言〉

a	————	a
i	————	i
u	————	u
e	———/———	
o	———/———	
ai	————	e
au・ao	————	o

(2)ハ行とカ行 南奄美方言では子音に特徴があります。最も特徴的なのはハ行の子音で、これが[p]で現れます。与論南部の立長^{りつちやう}方言の例をあげておきます。

パ：パー [pa:] (歯)

パナ [pana] (鼻・花)

パニ [pani] (羽根)

ピ：ピギ [pigi] (髭)

ピジャイ [pizai] (左)

ピー [pi:] (屁)

プ：プニ [puni] (船・骨)

プタ [puta] (蓋)

プー [pu:] (帆)

プユン [pujuN] (掘る)

これと並行して、立長方言ではカ行が[h]

で現れます。ただし、[h]になるのはカ行のうちのカ、ケ、コだけで、キとクはキ [ki], ク [ku] です。つまり、立長方言では共通語のカ、キ、ク、ケ、コがハ [ha], キ [ki], ク [ku], ヒ [çi], フ [Fu] と発音されるのです。

ハ：ハギ [kagi] (影)

ハディ [hadi] (風)

キ：キノー [kino:] (昨日)

キム [kimu] (肝)

ク：クサ [kusa] (草)

クチ [kutçi] (口)

ヒ：ヒブシ [çibuçi] (煙)

フ：フイ [Fui] (声)

フミ [Fumi] (米)

なぜ、このようなことが起きるのでしょうか。まず、ハ行子音がpで発音されるのは、日本語の古い時代（奈良時代）の発音が奄美・沖縄に残ったからだと言われます。日本語のハ行子音が古くはpだったということを最初に言ったのは、東京帝国大学教授の上田^{かずとし}万年（1868～1937）ですが、そのきっかけはイギリス人のチェンバレン（Basil Hall Chamberlain, 1850～1935）にありました。チェンバレンという人は1873年来日し、海軍兵学校寮教師、東京帝国大学博言学科（のちの言語学科）教授などを勤め、1911年まで日本に滞在した人です。彼はアイヌ語や琉球語（当時は琉球方言ではなく琉球語と呼ばれていました）に興味を持ち、1893年には1ヶ月ほど沖縄に滞在しています。チェンバレンがなぜ琉球語に興味を持ったかという点、祖父の影響が強かったからだと言います。彼の祖父、バジルホール（Basil Hall）は英

国海軍軍艦ライラ号の船長で、1816年に琉球へやってきて、1ヶ月間、琉球に滞在しました。このとき著したのが『朝鮮西部海岸および大琉球島航海探検記』(An Account of a Voyage of Discovery to the West Coast of Corea and the Great Loo-choo Island)です。チェンバレンはこれに影響を受けて、日本へやってきたのです。このチェンバレンから教えを受けたのが上田万年でした。おそらく上田の琉球語に関するp音の知識は、チェンバレンから得たものと思われます。

ハ行子音が古くはpだったというのは、「光」という語を考えると分かりやすいかもしれません。ぴかり [pikari] と光るもの、それが「光 [pikari]」です。ハ行子音はその後、本土ではFに変化し、さらにhに変化しましたが、南奄美方言や沖縄の宮古八重山方言では変化せずに、古いpがそのまま現在も使われているというわけです。

ところで、ハ行音がpだとすると、今度はカ行音がkからhに変化する可能性が出てきます。なぜなら、kとhは発音が近いからです。試しにカ [ka] をちょっとルーズに発音してみると、ハ [ha] になってしまいます。本土ではハ行が先にhになったために、カ行はhになることができなかったのですが(もしカ行がhになると、ハ行とカ行の区別ができなくなってしまう)、ハ行がpのまま残った南奄美や宮古八重山では、カ行がhに変化したのです。

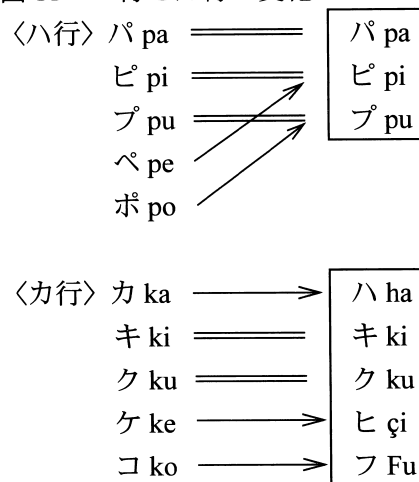
図10 ハ行子音とカ行子音の変化

	〈本土〉	〈南奄美〉
ハ行	p → h	p = p
カ行	k = k	k → h

しかし、なぜカ行の全部がhにならずに、カ、ケ、コだけがhになったのでしょうか。それには、母音の発音が関係しています。a, i, u, e, oのうちa, e, oは広母音・半広母音

(口を大きく開ける母音)、i, uは狭母音(口をあまり開けない母音)です。口を大きくあけるカ・ケ・コではk → hの変化が起き、口をあまり開けないキ・クではこの変化は起きなかったのです。このような変化とe → i, o → uという母音の変化が合わさって、ケ・コは結局、ヒ [çi]・フ [Fu] という発音になりました。

図11 ハ行とカ行の変化



上の図を見ると、子音がpのまま変わらなかったハ行では、母音がe → i, o → uと変化したのに伴って、ピとペ、プとポの区別がなくなっていますが、子音に変化したカ行では、母音が5つから3つに減少しても、子音が変わることによってカ・キ・ク・ケ・コの5つの音の区別が保たれています。言い換えれば、母音の区別を一部、子音が肩代わりしているわけです。似たようなことは、前号で述べた龍郷町のカ行でも起きていました。e → i, o → uの変化と子音の変化は、どうも連動しているようなふしがあります。これについては後に述べることにして、次に、喜界島南部方言を見てみましょう。

喜界島南部方言のハ行とカ行も与論島立長方言とよく似ていますが、iとuの母音の前で子音が喉頭化している点が違っています。喜界島^{しゅみち}塩道方言のカ行の例をあげておしまし

よう。

ハ：ハディ [hadi] (風)

ハタナ [hatana] (刀)

(cf.) カチュン [katʃuN] (書く)

チ：チニュー [ʧʃinju:] (昨日)

チン [ʧʃiN] (絹 (着物))

ク：クビ [ʔkubi] (首)

クスイ [ʔkusui] (薬)

ヒ：ヒー [çi:] (毛)

ヒブシ [çibuʃi] (煙)

フ：フミ [Fumi] (米)

フシ [Fuʃi] (腰)

(cf.) クイ [kui] (声)

チ [ʧʃi], ク [ʔku] は息を出さずに喉頭を閉鎖して発音する無気喉頭化音です。(cf.) としてあげたように、単語によっては [k] のままで現れることがあります。基本的に広母音・半広母音のカ・ケ・コでは $k \rightarrow h$ の変化が起き、狭母音のキ・クではこの変化が起きていません。キ・クではその代わり、子音が無気喉頭化しています。

(3)無気喉頭化子音 塩道方言は無気喉頭化音の多い方言で、力行だけでなくタ行のチ・ツやハ行のフに当たる音にも無気喉頭化音が現れます。無気喉頭化音が現れるのはもともと i と u の母音を持っていた音で、もともと e や o の母音を持っていた音には現れません (以下の例のうち、チ [ʧʃi], トウ [ʔtu], プ [ʔpu] が無気喉頭化音です)。

タ行 タ：ター [ta:] (田)

チ：チー [ʧʃi:] (血)

トウ：トウミ [ʔtumi] (爪)

トウヌ [ʔtunu] (角)

ティ：ティー [ti:] (手)

トゥ：トゥリ [turi] (鳥)

トゥシ [tuʃi] (年)

ハ行 パ：パナ [pana] (鼻・花)

パニ [pani] (羽根)

ピ：ピニ [pini] (髭)

ピヂ [pidʒi] (肘)

ピラ [pira] (へら)

プ：プニ [ʔpuni] (船)

プ：プニ [puni] (骨)

プシ [puʃi] (星)

塩道方言でも、 $e \rightarrow i$, $o \rightarrow u$ の変化と子音の変化は連動しているようです。

(4)母音の変化と子音の喉頭化 与論島の立長方言と喜界島の塩道方言の例を見ましたが、この二つの方言から分かることは、母音の変化と子音の変化が連動しているらしいということです。では、どう連動しているのでしょうか。

中本正智 (1976) によると、奄美・琉球方言の音変化はすべて $e \rightarrow i$, $o \rightarrow u$ の母音の変化に始まると言います。これに関して、私は別の考えを持っていますが、それは後に述べることにして、まず中本 (1976) の考えを見てみましょう。

前号で述べたように、この変化は ai や au などの母音連続が融合して ε (広めのエ) や ɔ (広めのオ) ができたことに端を発します。前号の図 8 をもう一度あげておきます。

図 8 母音の推移 (2)

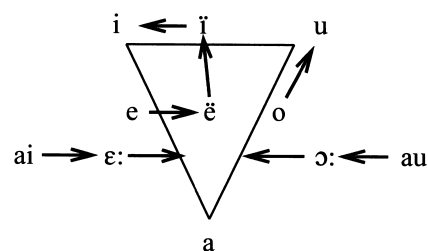


図 8 の変化が最後まで進むと、a, i, u の 3 母音体系ができるわけですが、3 母音になってしまうと、それまで区別していたイ段音とエ段音、ウ段音とオ段音が区別できなくなってしまいます。そこで、子音が喉頭化を起こして、この区別を保とうとしたというのです。

表4

カ 行	ハ 行
キ [ki] → キ' [ʔki]	ピ [pi] → ピ' [ʔpi]
ケ [ke] → キ [ki]	ペ [pe] → ピ [pi]
ク [ku] → ク' [ʔku]	プ [pu] → プ' [ʔpu]
コ [ko] → ク [ku]	ポ [po] → プ [pu]

立長方言では変化がさらに進み、ケがヒ [çi] に、コがフ [Fu] に変化しました。一方、ピとプはいったん獲得した喉頭性を失って、ペ・ポと合流しました。

カ行 キ [ki] → キ' [ʔki] → キ [ki]
 ケ [ke] → キ [ki] → ヒ [çi]
 ク [ku] → ク' [ʔku] → ク [ku]
 コ [ko] → ク [ku] → フ [Fu]

ハ行 ピ [pi] → ピ' [ʔpi] → ピ [pi]
 ペ [pe] → ピ [pi] → ピ [pi]
 プ [pu] → プ' [ʔpu] → プ [pu]
 ポ [po] → プ [pu] → プ [pu]

塩道方言は、喉頭化をかなり多く残していますが、ピは喉頭性を失い、ペと合流しています。

カ行 キ [ki] → キ' [ʔki] → チ' [ʔtʃi]
 ケ [ke] → キ [ki] → ヒ [çi]
 ク [ku] → ク' [ʔku]
 コ [ko] → ク [ku] → フ [Fu]

ハ行 ピ [pi] → ピ' [ʔpi] → ピ [pi]
 ペ [pe] → ピ [pi] → ピ [pi]
 プ [pu] → プ' [ʔpu]
 ポ [po] → プ [pu]

ちなみに、前号で取り上げた奄美大島龍郷町方言（北奄美方言）の力行と八行の変遷は次の通りです。

カ行 キ [ki] → キ' [ʔki]
 ケ [ke] → クィ [ki]
 ク [ku] → ク' [ʔku]
 コ [ko] → ク [ku]
 ハ行 ピ [pi] → ピ' [ʔpi] → ピ [pi] → ヒ [çi]
 ペ [pe] → プィ [pi] → フウィ [Fi]

プ [pu] → プ' [ʔpu] → フ [Fu]
 ポ [po] → プ [pu] → フ [Fu]

ところで、e → i, o → u の変化は中本（1976）によると、15世紀ごろにはすでに起きていたのではないかと思います。また、近年の研究によると、『おもろさうし』が書かれた16世紀から17世紀にかけては、母音変化が進行中であったと言います。ただし、これは琉球王朝の首里でのことで、奄美でも同じ時期に母音の変化が起きたのかどうかは未詳です。

(5)母音の変化が先か？ しかし、最初に母音の変化が起き、それが子音の変化を誘発したという説には、私は少し疑問を持っています。確かに、i と e, u と o が合流する南奄美方言では、元の音の区別を保つために子音が喉頭化する必要があったかもしれませんが、i と e が i と i で区別される北奄美方言では、キ [ki] / クィ [ki] という形で「き」と「け」を区別することが十分可能です。実際、マ行などは、ミ [mi] / ムィ [mi] で「み」と「め」を区別しています。そうすると、母音の変化が子音の喉頭化を誘発したとは必ずしも言えないことになります。

その上、北奄美方言や喜界島方言では、キ' [ʔki], ク' [ʔku] だけでなくカ [ka] にも喉頭性が現れることがあります。また、語中の力行子音はどちらかというと喉頭化しているように思います。

以上のことを考えると、喉頭化は母音の変化に誘発されて、後になって生じたのではなく、奄美・沖縄方言が根源的に持っていた特徴だったのではないかと、それに対して、母音の変化はずっと後になって（おそらく15世紀より後に）起きたのではないかとと思われるのです。

では、上記の力行・八行に対して、どのような変化プロセスを考えればよいのでしょうか。おそらく、次のようなものだったのでは

ないでしょうか。

◆龍郷町方言

力行 カ' [ʔka] →カ [ka]
 キ' [ʔki]
 ケ' [ʔke] →ケ [ke] →クィ [kĩ]
 ク' [ʔku]
 コ' [ʔko] →コ [ko] →ク [ku]
 八行 パ' [ʔpa] →パ [pa] →ハ [ha]
 ピ' [ʔpi] →ピ [pi] →ヒ [çi]
 ペ' [ʔpe] →ペ [pe] →プィ [pĩ]
 →フウィ [Fi]
 プ' [ʔpu] →プ [pu] →フ [Fu]
 ポ' [ʔpo] →ポ [po] →プ [pu]

◆塩道方言

力行 カ' [ʔka] →カ [ka] →ハ [ha]
 キ' [ʔki] →チ' [ʔtʃi]
 ケ' [ʔke] →ケ [ke] →キ [ki] →ヒ [çi]
 ク' [ʔku]
 コ' [ʔko] →コ [ko] →ク [ku] →フ [Fu]
 八行 パ' [ʔpa] →パ [pa]
 ピ' [ʔpi] →ピ [pi] →ヒ [çi]
 ペ' [ʔpe] →ペ [pe]
 プ' [ʔpu]
 ポ' [ʔpo] →ポ [po] →プ [pu]

◆立長方言

力行 カ' [ʔka] →カ [ka] →ハ [ha]
 キ' [ʔki] →キ [ki]
 ケ' [ʔke] →ケ [ke] →キ [ki] →ヒ [çi]
 ク' [ʔku] →ク [ku]
 コ' [ʔko] →コ [ko] →ク [ku] →フ [Fu]
 八行 パ' [ʔpa] →パ [pa]
 ピ' [ʔpi] →ピ [pi] →ヒ [çi]
 ペ' [ʔpe] →ペ [pe]
 プ' [ʔpu] →プ [pu] →フ [Fu]
 ポ' [ʔpo] →ポ [po] →プ [pu]

最初は、すべての力行子音、パ行子音が喉

頭化の特徴を持っていましたが、次第に（いつの時代とは言えませんが）広母音・半広母音の前で子音の喉頭化がゆるむという変化が始まります。広母音・半広母音は口を大きく開ける発音ですから、狭母音に比べて喉頭化がゆるみやすかったわけです。喉頭化がゆるむと、無気音（息が出ない発音）だったものが有気音（息が出る発音）に変わります。そして、もっと息の量が多くなると、h（摩擦音）に変わります。一方、狭母音 i, u の前では喉頭化が保たれやすかったので、キ'・ク'・ピ'・プ'にはあまり変化が起きませんでした。

以上は喉頭化子音を比較的に残す龍郷町方言と塩道方言の歴史ですが、立長方言では第2段階目で、母音の種類にかぎらず喉頭化がゆるむという変化が起きました。ただし、ケ'・コ'の方はケ [ke]・コ [ko] からキ [ki]・ク [ku] を経てヒ [çi]・フ [Fu] まで変化しているのに、キ'・ク'の方はキ [ki]・ク [ku] で変化が終わっていますから、やはり、広母音・半広母音を持つ音では変化がいきに進み、狭母音を持つ音では変化が遅かったと言えそうです。

このような変化プロセスを設定すると、奄美・沖縄で起きた変化は、一貫して喉の緊張をゆるめ、息の出る量を増やすという変化だったと説明することができます。中本（1976）では、いったん喉頭化したʔk やʔp が、次には喉頭化をなくして、また k や p にもどるといった、行ったり来たりの変化を考えていますが、このような変化はかなり不自然です。ことばの変化を考える際には、変化の方向性が大切なのです。

ところで、無気喉頭化が奄美・沖縄方言の根源的な特徴だったとすると、このことはいったい、何を意味するのでしょうか。無気音というと、以前からも指摘されているように、中国語や韓国語の無気音との関連を思い浮かべてしまうのですが、これについては軽々に

結論を出すべきではないでしょう。さらに詳しい検討をまつことにします。

付 記

与論島立長方言, 喜界島塩道方言の用例は, 主に中本正智 (1976) から引用しました。

文 献

- 九学会 (1959) 『奄美 自然と文化』 日本
学術振興会
- 佐藤 清 (1987) 「おもろさうしの木と毛
の表記について」 法政大学沖縄文
化研究所『琉球の方言』 20
- 高橋俊三 (1991) 『おもろさうしの国語学
的研究』 武蔵野書院
- 中本正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』
法政大学出版局
- 服部四郎 (1958) 「奄美群島の諸方言につ
いてー沖縄・先島諸方言との比較
ー」 『人類科学』 IV (『日本語の系
統』 岩波書店に再録)
- 服部四郎 (1959) 『日本語の系統』 岩波書
店
- 服部四郎 (1979) 「日本祖語について」 『月
刊言語』 8-1
- 木部暢子 (2004) 「島が残した古態」 『月刊
言語』 33-1